

愛と死の絡繹

から
くり

—北京の月季（ばら）、増補版—

高木徳一



目次

著者略歴	280	278	190	74	3
あとがき	•	•	•	•	•
二・結婚と喪失体験	•	•	•	•	•
一・出会いと文学散歩	•	•	•	•	•
三・事故と有終の美	•	•	•	•	•

一・出会いと文学散歩

薄暗い空間に熱気が立ち込めていた。輝くミラーボールの光がホールを照らし出す。

ここは北京のカラオケの店で、左手の火傷の傷跡にむしやぶりつき舐め回す日本男性の白髪にじつと見入るのは、張麗梅であつた。幼児期の火傷

は醜く、二つの瘤山を作り、夏でも薄い長袖で隠し続けてきた。麗梅にとっては、これが心の中の八割を占める。小、中、高校時代に、何かにつけて消極的になつたのも、このせいであつた。自分の運命を酷く呪つた。母の不注意で・・・母のバカと幾万回叫んだ事か。ボーカルが出来ても、傷を見付けるとどうしたのだと目をひん剥いて声高になり、無情にも去つて行つた。過去から的心の深い傷を、優しく癒してくれている人が目の前にいる。幻なのか・・・頬を思い切り抓つた。痛

みを認識する。神様が巡り会わせてくれた男など感謝し、この時間が永久に続く事を願つた。ダンスに誘われ、フロアーに出る。四拍子のスローナ流れが癒されてゆく心を包み込んでくれた。彼の厚い胸板に小さな顔を押し当てる。一曲、二曲と踊る。ミラーボールの反射鏡が彼の端正な横顔を照らす。肩を抱かれながら席に戻つた。互いにグラスのビールを干す。心の傷に染み渡るのを感じた。独学で勉強した片言の日本語で話し掛けられた。「中国には何時来ましたか」と。「去年三月に。東京から北京に赴任して、もう一年になります」とのゆつくりした中國語が返ってきた。「奥様と一緒に来ましたか」と問えば、「否、この歳で独身なんだ。大学時代、好きな女が癌で亡くなつて・・・」それから何と無く結婚せずに今日まで来てしまつた。何回か、お見合いはしたけどね」の日語發音に、内容は七割程度しか理解出来ないが、彼の目にキラリと光るものを見逃さなかつた。

心根の優しい男だと直感した。

「まあ、可哀相に、好きな女が死んだの・・。私は北京の愛人になってあげる」

アイレン

無意識に出たこの言葉に、麗梅自身戸惑つた。

愛人と言う響きに、立花信一は引っ掛けた。不倫関係がイメージされる。自分は未婚だから彼女が既婚者なのかと。

「結婚しているの」「してません」

そうか、未だ日語の語彙が少ないから、恋人関係の事に違いないと一人合点した。

翌年一月の今日は、全国営業所の所長会議が北京であり、その懇親会後の二次会に部下六人とカラオケに来たのだ。信一は一次会で皆にけしかけられ、白酒とビールのチャンポンでしこたま飲んでいた。項垂れながら、質問を発する。

「君は二十四、五歳と言う所かな」「そう、当り。一九七三年七月三日生まれで、二十四歳半。七三七三で覚えやすいでしょ」「そうだね。七五三祝いの五抜きで一度聞いたら忘れられない。誕生日には何かプレゼントしよう」「まあ、うれしい」「俺は幾つに見えるかな。当てて『へらん』」「そうね・・。

「恋人は居るの」「いません。朋友（友達）はいりますけど」「嘘だろう。恋人なんだろ。水商売の女は恋人や夫は居ないと皆言う」「本当です」麗梅の目は純粋であった。

信一は泉水ビル合弁会社の営業部長として、一九九八年三月、北京に単身赴任した。

「恋人は居るの」「いません。朋友（友達）はいりますけど」「嘘だろう。恋人なんだろ。水商売の女は恋人や夫は居ないと皆言う」「本当です」

三歳だよ。君のお父さんと同じ位かな」「父は六十二。私は五人兄弟姉妹の末っ子」「そうか。それで綺麗な顔に甘える様な所があるんだ」「まあ。きれいいだなんて。きれいじゃないわ」「そんな事は無い。俺の好きなタイプの顔だよ」と信一は言いつつ、

白いほっぺに厚い唇をそつと押し付けた。麗梅は彼の手を強く握り締める。

「もし、気が向いたら、この名刺にマンションの電話番号を書くから電話してくれ。土曜の午前中は中会話のレッスンが有るから、午後がいいな」

「ええ・・」と麗梅は頷き、拝むようにして名刺を受け取る。立花信一の文字がぼんやり見えた。

裏にして、ローマ字でたちばなしんいちと読める。彼の部下達は思い思いに歌つたり、一人でダンスをしたり、カップルで舞つたりしている。片隅では熱い抱擁場面もある。信一は音痴だが歌好きで、野球で鳴らしたリズム感は抜群であり、中国でチームとなっている千昌夫の『北国の春』のカラオ

ケテープを日本から持参し、毎夜練習して飽きが来ていた。中国語訳も教師から特訓を受けるが発音が難しく、完璧では無い。残念ながら日本版はこの店には無かつた。再び、麗梅の細い手を取り、ホールに誘いステップを踏む。何時の間にか彼の

両手は麗梅のくびれた腰にあつた。彼女はそれ程飲んでいないが、頬がピンク色に染まり、妙に色っぽい。

「もう、十二時になる。明日も会議があるから、この辺でお開きにする」

信一に了解を取つてから、でつぱり腹の突き出した金北京営業所所長が皆を見回し、中国語で叫んだ。

麗梅は名残惜しい気がした。

帰り際、誰言うとも無く、「部長！ 張小姐（お嬢さん）が帰るので、送つてやつて下さいよ」の声が星空の下で上がつた。

「そうですよ。部長のマンションと同じ方向ですから」と、口々に何人かが流暢な日語で言う。信一はチヨツと照れ臭かつたが好みの女なので、その言葉に乗つた。皆にはやされる様にして、小さな赤いタクシーは走り去る。信一が麗梅の右手を

ギュッと握ると、直に応答がきた。

「中国に来て、今夜は一番楽しい時を過ごせた。こんなに可愛い女に会えるなんて夢みたいだよ。

本当に有り難う」

少なくなった車両のライトが広い六車線のポプラ並木の道路を行き交う。見覚えの無い家並が一気に通り過ぎた。

「この辺で降ります」「そう。また、是非会いたい。

君の電話番号は・・

麗梅は、「こちらから電話します」と言う。掛けられると、不都合でもあるのかなど、一瞬、信一は

考えた。もしかして、旦那が居たりして・・。内ポケットの財布から百元札（一元＝約十五円）一枚取り出し、手に握らせた。「いいです」と麗梅は押し返そとしたが、無理に彼女の指を折つて札を包ませた。「ありがとうございます」と、言の葉を載せて、甘い眼差しが返つて来た。店でチップとして二百元を渡してあるので、追加は要らないと思つ

たが、作戦として気前の良さを見せたかった。昼の弁当代は十元前後で三百元はかなりの額である（但し、日本料理は馬鹿高く百元近い）。

車が歩道側に寄り、麗梅が外に出た時、信一は軽く投げキッスを送り、後ろ窓から彼女が見えなくなるまで見詰め続けた。大理石の柱が立つマンションの玄関前で下車すると、月光が闇を照らしている。部屋で一風呂浴びた肉体は心地好く、ベッドで今後の展開を夢想した。

翌朝、信一は目覚めると愛人なる言葉が鮮やかに蘇り、簡約現代中国語辞典を括つた。

第一義的には連れ合いの呼称、二義的には恋人とある。前者の意味で使つたのだと勝手に解釈し、気持ちが高ぶる。味噌汁が胸を更に熱くした。

一方、信一と別れた麗梅は京広ビルの前の朝

チングクワン
チャオ

一月の真夜中は酔いを一気に醒まさせたが、感情の酔いには何らなす術も無かつた。暖かい泉が心の奥底からコンコンと湧き続ける。街路樹は寂しげで葉は殆ど無い。しかし、麗梅のハートの樹は幸せの葉で光り輝く。生まれて初めて味わうこの感激。信一が狂つた様に傷跡を舐めまくつている姿が、瞼の奥に鮮明に映つた。

（ありがとう、信一さん。あなたは私の心のお医者さん。コンプレックスが夜空の彼方へ猛スピードで飛び去りました）

黒ずんだレンガ造りの十五階建てアパートの入り口に着いた。エレベーターは夜の十二時から朝五時迄運転停止なので、九階迄歩かざるを得ない。外階段を上る。長い影も何時もの不吉な物と違つた様に思えた。

（信一さんは日本に妻子が居て、自由気ままに遊

び耽つているのだわ。ダンスも上手いし、口説き文句もしやれている。そんな男に夢中になる自分が馬鹿ね、ね、そうでしょ、お月さん。答えてよ）上弦の白い月は雲間から顔を出しているが、無言のまま。

麗梅は静かにドアに鍵を差し込み、回した。友を起こさない様に抜き足、差し足で入り、ピンクの花柄模様のネグリジェに着替え、梯子を伝い二段ベッドに昇る。布団に潜り込むが、中々寝付けない。

今頃、信一さんはどうしているかしら・・。グレー、寝て いるかな。それとも、私の事を思い出していてくれているかしら・・。こんなにも甘い夜を演出してくれたなんて、神様、憎い。思わず、掛け布団を信一に見立て口付けした。生まれてこの方、感じた事の無い鼓動が全身を震えます。押さえ付け様とすると、反発するかの様に胸の高鳴りは一段と激しさを増す。仕事の気疲れも手伝つ

てか、何時しか麗梅は軽い寝息を立てていた。

翌朝十時に麗梅は目覚め、東端の共同炊事場に

（ワニシャオリン）

向つた。同室の王小鈴の広い背に挨拶を投げ掛けると、眼が大きく見開いた瓜実顔が振り返る。

朝の炊事は彼女と一週間交代でしている。顔の輝きから好い事が有つたと小鈴に見抜かれ、話す様しきかけられた。内緒にしておきたかったが、小学校以来の親友で姉妹以上に心が通い合う間柄なので、打ち明けた。

「男が優しくしてくれるのは下心が有るからよ。傷を舐めていたと言うのも、暗がりで判ら無いし、相手が酔つていたせいよ。眼を覚まさなければ駄目。单なるお客様なんだから、金儲けをしなくちゃあ」「そんなんじや無い。話さなきやあ、良かつた」「御免ね。貴女は涙脆く、男に騙され易いタイプだから、今フランスでやつてゐるサッカーのワールドカップじゃないけれど、イエローカード

（警告）を親切心で上げたのよ」「そりやあ、ゴト寧に・・」

麗梅は膨れ顔で言い返した。顔洗いを済ませ、二人で料理を部屋に運んだ。トマト炒めと卵の黄身の混ぜ合わせ、マヨネーズを着けた胡瓜、温い水餃子をおかずには、香ばしい御飯を口に入れる。

念入りに化粧を施した小鈴は昼過ぎに出掛ける。

「さあ、今日も稼ごうよ、精一杯。じやあ、行つて来るから」「気を付けて行つてらっしゃい」

ドアから消えた小鈴はファッションモデル嬢で、今日は暁食品会社のCF撮りである。仕事の無い日はカラオケ嬢に変身する。二人の部屋は廊下の北側で幅三米、奥行き五米と細長い。北の窓側に机と椅子二脚、それに洋服箪笥が有るだけ。電気釜と中古の冷蔵庫を折半して半年前に買った。洗面所、トイレ、シャワー室、炊事場は共同で、東端と西端に在る。従つて、家賃は一人月額三百元と安い。昼の弁当代が十元位で、夕食は外食する

続きは
完成版で
お楽しみ下さい。